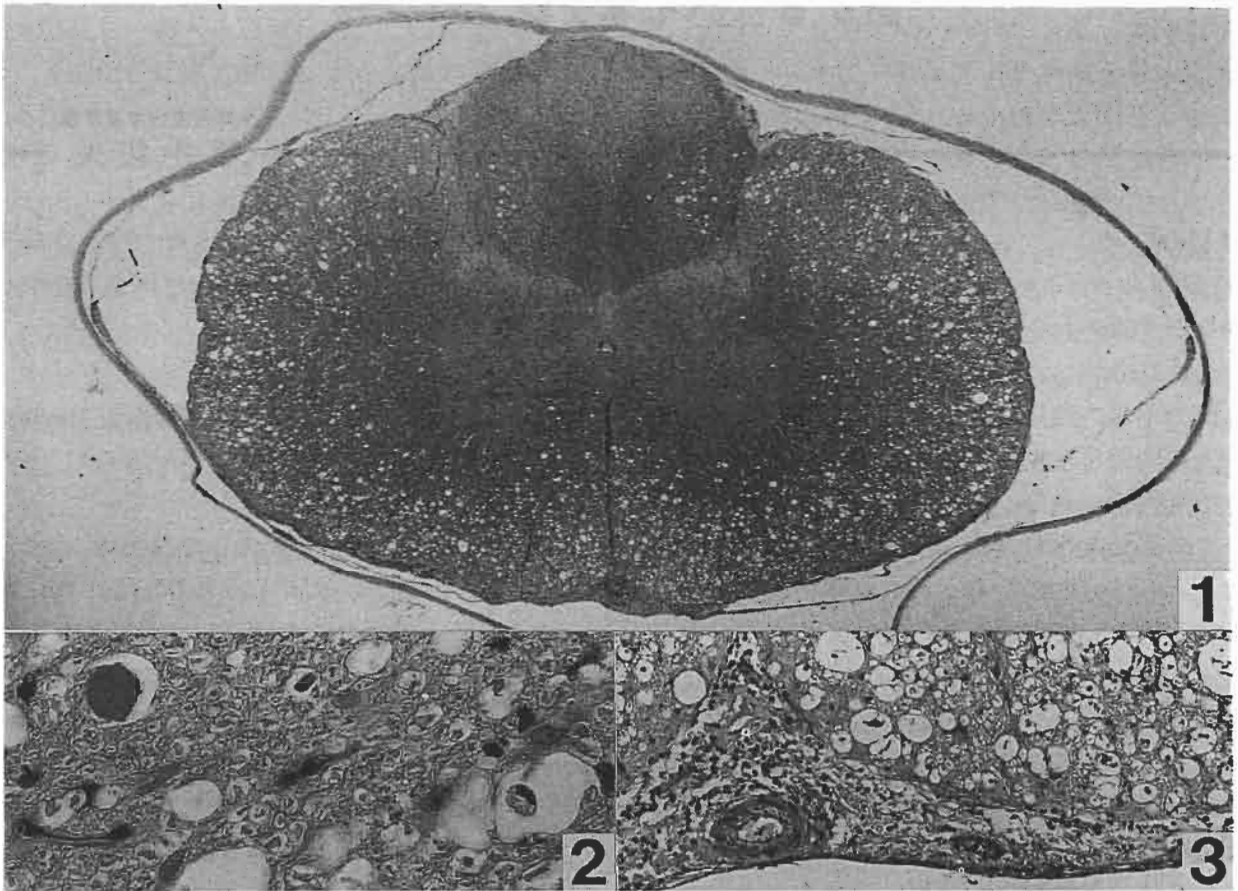


# 猫の脊髄

大阪府立大学農学部獣医病理学講座出題 第34回獣医病理学研修会標本No.630



動物：日本猫，雄，9ヶ月齢。

臨床事項：1993年2月15日（7ヶ月齢時）より，1日3～4回両後肢に痙攣を起こし，次第に全身性痙攣に移行した。4月8日より1日20～30回の全身性痙攣が観察され，フェノバルブ等の抗痙攣剤を投与したが症状は改善されなかった。4月14日に起立不能に陥ったため，4月19日安楽死後，直ちに剖検した。剖検時のF I P抗体価は3,200倍であった。

剖検所見：大脳，小脳及び脊髄は水腫性で，大脳の断面では側脳室が軽度拡張し，脳脊髄液の軽度貯留が見られた。その他，脾の軽度腫大を認めた以外，主要臓器に特に異常は観察されなかった。

病理組織所見：すべての脊髄レベルでの白質外側に大小不同の空胞が認められ，海綿状を呈していた（写真1，H E染色，×20）。一部の空胞内には軸索の球状膨化が見られ，細胞残屑を貪食したマクロファージの浸潤も認められた（写真2，H E染色，×440）。これらの変化は胸髄で最も強く，頸髄及び腰髄では胸髄に比べやや軽度であった。この空胞病変部の髄鞘は，ルクソール・ファーストブルー・H E染色で淡染し，電顕的には髄鞘の著しい菲薄化及び髄鞘板の分離空胞化を示した。脊髄髄膜にはリンパ

球及び形質細胞からなる軽度の炎症性細胞浸潤が主として腹側に認められた（写真3，H E染色，×110）。脊髄灰白質及び脊髄神経には著変を認めなかった。脊髄白質における髄鞘の空胞化と同様の変化は，大脳から小脳及び延髄にわたる白質にも種々の程度に見られ，その分布に随伴して髄膜，脳室周囲及び脈絡叢に軽度から高度の形質細胞及びマクロファージからなる炎症性病変が認められた。その他，眼球には形質細胞及びリンパ球浸潤からなるブドウ膜炎が，また，腸間膜リンパ節では壊死性リンパ節炎が観察された。

考察：脊髄白質における髄鞘の空胞化を除くと，本例の組織所見の特徴及び分布は，猫伝染性腹膜炎のdry typeに一致し，F I P抗体価の著しい上昇と合わせ，本症例の猫伝染性腹膜炎感染が示された。脊髄白質における髄鞘の空胞化は，炎症性細胞浸潤の部位と一致して出現する傾向があり，空胞病変と炎症性病変との関連が推察されたが，猫伝染性腹膜炎感染が空胞病変形成に対して関与したか否かは明らかでなかった。

診断：猫伝染性腹膜炎罹患猫におけるMyelopathyを伴った脳脊髄炎。